

南都大きな ???

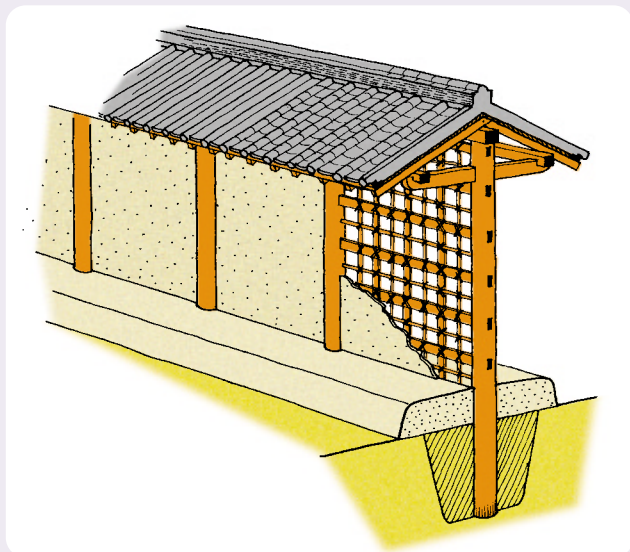
これは、1998年に平城宮跡第一次大極殿院の南西隅(平城第296次調査)から出土した木樋^{もくひ}です。全長7m 50cm・直径40cmの大木(コウヤマキ)を削り抜いた暗渠^{あんきょ}、つまり地中に埋められた排水溝^{うめき}です。

よく見てみると、方形の穴が随所にあり、それを小さな埋木で塞いでいることに気が付きます。このような穴が開いていると、水が漏れて流れなくなってしまいます。それではなぜ、木樋にこのような穴が開いているのでしょうか。これらの穴は等間隔にまっすぐならんでいます。この配置こそがすべての謎を解明する鍵なのです。実は、この材は元々掘立柱塀の柱として使われていたもので、小さな穴は間渡穴^{まわたしあな}といって柱と柱の間をつなぐ横材を通すためのものなのです。地中に埋められていた部分を考慮しても、この塀は実に5mもの高さがあったことがわかります。この塀を取り壊す際、資材を有効活用するために、間渡穴をふさぎ、柱の中を削り抜いて穴も塞いで木樋に転用したのです。

今夏、10年間プールで水漬けの状態にあったこの木樋を引き上げて写真撮影や実測作業をおこないました。奈良文化財研究所のスタジオは大型の遺物を撮影するために十分な広さがあります。しかし、この木樋は大人7人がかりでも少し動かすのが精一杯なほど重いため、トラックごとスタジオの中に入らなければなりません。

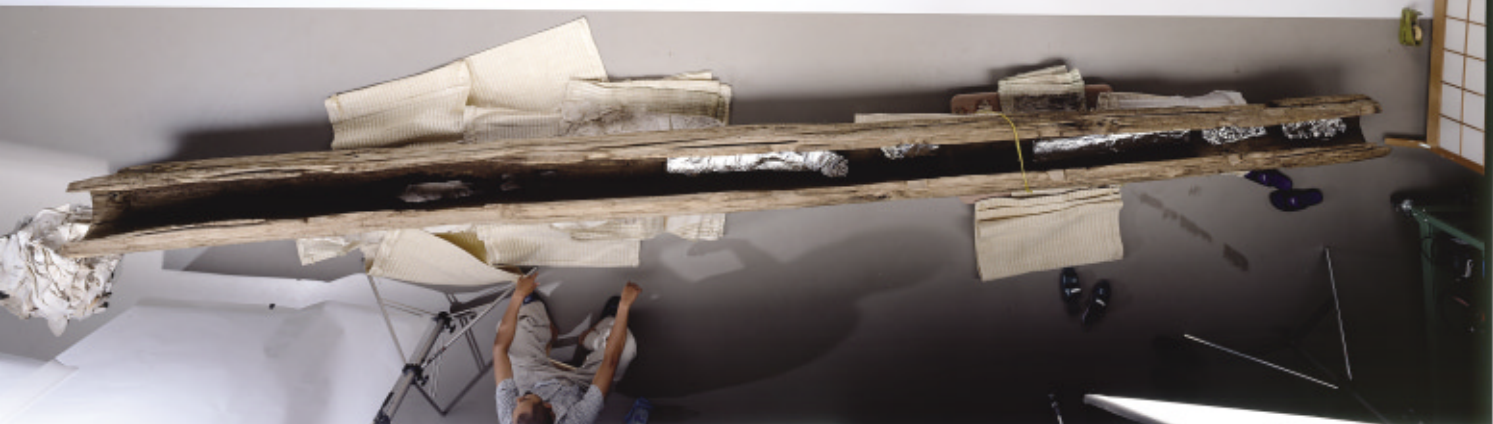
現在、木樋は保存処理をしている最中です。皆様にご覧いただける日もそう遠くないでしょう。

(都城発掘調査部 和田 一之輔)



掘立柱塀のイメージ この柱が木樋に転用された
(宮本長二郎1986『平城京』草思社刊 p.33に彩色)





長さ7.5mにもおよぶ木桶